

社長所感（11月）

11月8日（火）には、アメリカの大統領選挙が行われ、第45代大統領が選出されません。

アメリカの大統領選挙は、4年ごとの「11月の第一月曜日の次の火曜日」と決められており、遠い先まで選挙日を特定することが可能となっています。

ちなみに、次の大統領選は2020年11月3日（火曜日…わが国では「文化の日」の祝日です。）となり、丁度東京オリンピックの興奮が冷めた頃に、大統領選がヒート・アップするという段取りになっています。

このように、日程が将来にわたってセットできるのは、大統領が欠けた場合に、副大統領が代位して大統領になり、残任期間を務めるというシステムになっているからで、実際ケネディ大統領がダラスで暗殺された際はジョンソン副大統領が、ニクソン大統領がウォーターゲート事件で辞任した際はフォード副大統領が、それぞれ代位して残任期間を務めました。

このため、副大統領に誰になるかも国民の関心事で、副大統領候補者同士のテレビ討論会（1回）も、大統領候補者同士のテレビ討論会（3回）の合間に行われます。

今回の大統領候補者同士のテレビ討論会は、相手候補の資質上の問題点やスキャンダルを攻撃しあう「最も醜い争い」と言われました。

さらに、タイム誌（2016・10・10）などによると、アメリカの民主主義の正当性に疑問符を与えるべく、実質的に民主主義国でない国々が、インターネットなどを操作して投票結果を不正にゆがめようとしているという動きも報じられています。

まさに、内憂外患のアメリカ大統領選と言えそうです。

昔の話になりますが、エリザベス・テラーとジェームス・ディーンとが共演した「ジャイアンツ」という映画があり、その中で、確か、「偉大な国とは、面積の大きな国でも、豊かな国でもない。国家の危急存亡のときに偉大なリーダーが出る国のことを言うんだよ。」「その点で、この国は今まで大変ラッキーだった。」

というような会話があったと記憶しています。

両大統領候補者、大統領となった暁には、偉大なリーダーに変身できるのでしょうか。それとも、健康問題又はスキャンダルで辞任し、良識派と言われる副大統領が代位して大統領になるというラッキー（？）に恵まれるのでしょうか？

アメリカの民主政治のもう一つの偉大な点は、過ちや行き過ぎがあっても自らの力で修復できるという復元力にあると言われていています。（駐米大使で、政治学者のイギリス人ブライス博士の言葉で、「復元力」という言葉は、保険の思想とも繋がります。）

その意味で、近日に迫った大統領選挙はもとより、今後4年間のアメリカ政治の歩み、そして、4年後の大統領選挙についても注視していきたいと思っています。